

## 高品質の花を家族やスタッフ、「北育ち元気村花き生産組合」の仲間と作り続け、花の魅力を一人でも多くの消費者に伝えたい



**内藤 敬人 (ないとう たかひと) さん** フラワーファーム内藤代表、北育ち元気村花き生産組合副組合長

1969年東京生まれ。1992年東京農業大学農学部農業拓殖学科在学中に（公財）国際農業者交流協会の農業研修生海外派遣事業でアメリカへ。卒業し1994年、(株)日比谷花壇に入社。京王プラザホテル店などに5年間勤務。1998年深川市で研修生として2年の修行の後2000年に就農。現在はダリア・スターチス・花木類・草花類など多品目を栽培している。

日比谷花壇の同期として出会い、最強の右腕の奥様、安美さんとアナベルのハウスで。撮影2025年9月23日

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。37回目となる今回は、深川市にUターンし花き農家として、地域のリーダーの一人として活動する内藤敬人さんにお話を聞きました。アメリカでの農業実習でともに苦勞を乗り越えた全国各地の担い手たちからの刺激が、内藤さんが農家になろうと決意したきっかけになりました。一流の花を扱う東京の花店勤務時代に知った北海道の花の品質の高さが「北海道で花を育てたい!」と、強く背中を押した理由の一つだったことなどをお伝えします。

**アメリカ農業研修が就農のきっかけだったのですか？**

はい。一緒に派遣された25人の同期の21人が農家の子弟で、自分は少数派の非農家でした。その中で青森、秋田、長野、千葉、和歌山の後継者と仲良くなり、かつ刺激を受けました。今でも作物を送り合い交流しています。彼らと話をする中で、大学時代に抱いていた農業へのあこがれから一歩進んで、就農してみたいと考えるようになりました。当時の農業研修は、基礎学習を1カ月シアトルで行い、農業実習先は農繁期の9カ月をアリゾナ州の果樹農家に。1人で入るので、ずっと大変でした。最後にカリフォルニアの州立大学で2カ月間、アグリビジネスを学んで修了でした。

## 「北海道で花き生産農家になる」と決めた理由は？

新卒で入社した日比谷花壇で触れた、夏場の北海道産の花の品質に驚いたことが一番の理由です。花色がよく、日持ちもする素晴らしい花を使い、日々宴会装花を作っていました。

仕事も仲間にも恵まれ充実していたのですが、心の奥にある“農業をしたい。どうせ農業をやるのなら高い評価をいただける花を北海道で作りたい”という気持ちを次第に抑えられなくなっていました。

## 移住先を決めるまでの道のりをお聞かせください

北海道に頼れる知り合いはいなかったので1997年に東京に開設された「北海道担い手センター」に行き、園芸農家をしたいと登録しました。ほぼ同時期にお世話になっている仕入れ先の社長さんに、「北海道で花を作りたいのですが、どこの地域がいいですか？」と相談し、その方から即答で「北空知がいいのでは？」とアドバイスをもらいました。さらに、留学でお世話になった協会にも相談に行きました。すると、空知にOBが3人いることを知り、その1人に連絡をしたら「ぜひ来い」と言ってくださいました。こうして北空知のここ深川市にたどり着きました。1997年8月、27歳でした。

## 内藤さんは深川市で花生産者の新規就農第1号だったとか

はい、そうです。さまざまなご縁があって深川市に初めて来た時、当時の市長河野順吉さんにお会いしました。そのあと市の職員の方が僕ら夫婦を市内のあちこちに連れて行ってくださいました。東京や大都市では考えられない歓待に、恐縮と感激の両方の気持ちを持ったことを覚えています。

## この28年間でくじけそうになったことはありますか？

2002年1月の冬の爆弾低気圧で、大切な3棟のビニールハウスが吹き飛ばされました。2月に長女が生

まれる直前のタイミングでした。すぐに、JA青年部の仲間が総出で助けに駆けつけてくれました。この被害で心が折れて、諦めて東京に戻ってしまうのではないかと心配してくれたのではないのでしょうか…。片付けを手伝ってくれた御恩は決して忘れられません。深川市は農業で成り立っているまちだから新しい就農者を大事に守ろうという地域全体の思いを感じました。ありがたかったです。

## 「花の魅力」と今後について教えてください

そうですね。花には魅力がたくさんあり語りつくせませんが…。花は贈っても贈られても幸福感がある特別なものです。だから自分たち生産者には責任があります。そして願いもあります。たとえば、スターチスの月別生産量が夏季日本一（2024年度調べ）、花き付け戸数が約100戸で北海道一を含め、深川市が全道有数の花の産地であることを地元の人にもっと知ってもらいたいのです。そして、深川市を含めた北空知の生産者の思いを形にしようと、自分が所属する「北育ち元気村花き生産組合」では、2020年から『元気村生花リレー』を続けています。管内で丹精込めて栽培した花で深川・雨竜・北竜・妹背牛・沼田の役所口ビー、秩父別の温泉施設、JA2カ所計8カ所に自分たちでアレンジメントを制作し飾っています。生産地に暮らす消費者にもっと花のことを知ってほしいし、気軽に花を飾ってもらいたいのです。地元の普江小学校でも2018年から「花育」授業をさせていただいています。こうした取り組みを仲間とともに続けて行きます。

(2025年11月取材)

### インタビュー後記

2002年のハウスが飛んだ大被害に続き、04年9月の台風18号を乗り越えてなんとか光が見えたら、また大きな自然災害…という、厳しすぎる現実を乗り越えてきた内藤さん。私の目の前にいる内藤さんの笑顔やまっすぐな眼差しから、ものすごいパワーを感じました。そして、お話に引き込まれました。夢を形にする人のしなやかさと強さが、間違いなくそこにありました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表